

も活躍するようになる。

里見浩太郎に運命を感じる

古村が本格的に俳優を志すきっかけになったキーパーソンはもう一人いる。時代劇で有名な里見浩太郎だ。

「小学校2年のときにテレビで見た『長七郎江戸日記』で大ファンになり、高校1年の夏、東京・銀座の新橋演舞場で上演されていた『里見浩太郎特別公演』を一人で観に行きました。高校生でしたが夜の部の1万3000円もする枚数席のチケットを買って、『新撰組余聞 花かんざし』という芝居を見たのです。この時の衝撃は今でもはっきり覚えています。とにかくかっこよかったです。オンステージのエンディングでファンレターを恐る恐る手渡しましたが、間近で拝見した姿に強烈な衝撃が走りました。『この人だ！』と。はっきりとは分からないけれど、何かの運命を感じたのです」

「大学受験は東京しか考えなかった」と古村は振り返る。本格的に芸能活動をするならば、東京しかないと考えた。東京都立大学経済

学部へ進学し、同時に様々なオーディションを受け始めていた。

2001(平成13)年、女優・葉月里緒奈の当時の所属事務所、セブンスター「新人募集オーディション」に見事合格する。これをきっかけに、女優・小川真由美から演技指導も受けた。そしてその後、憧れの人、里見浩太郎のもとで学ぶことになる。

「当時、東京の高円寺に里見先生の事務所がありました。この事務所に隣接していた中国料理店はファンの間でも有名で、里見先生のファンでいつもにぎわっていました。自分も大学に進学してからこちらに通うようになり、顔を出しているうちに事務所の方とも親しくさせていただくようになりました。高校生のときに感じた、この人だ！という思いがまた強まっていき、そこで、里見先生の付き人にどうでしょうか？と申し出たのです。でも、里見先生は弟子をとらない人なのでダメだと言われました。まず大学を卒業しなさいとも伝えられました」

しかし、古村はあきらめなかった。言われたとおり昼夜勉強に打ち込み、大学3年までにほとんど



個人の活動に本腰を入れ始め、精力的にオーディションなどを受ける日々。「人との出会いを大切に、確実に一步一步進みたい」と話す。

の単位を取得。4年生の1年間を自由に動けるようにしたかいがあって、ドラマの撮影やディナーショーなどで多忙を極める里見浩太郎の付き人のような仕事に携わるようになった。

里見が出演した2002年のNHK大河ドラマ「利家とまつ〜加賀百万石物語〜」では生の現場を見て「とても勉強になった」と話す。また、TBS系「水戸黄門」

で里見が5代目・水戸光圀役に決定した時は、京都に呼ばれてその

貴重な瞬間に立ち会い、東映太秦撮影所での生活を体験した。日本を代表する一流のスターから学ぶことは実に多かった。「里見先生はもちろん、奥様や事務所の方にも大変お世話になっており、本当に感謝しています」と古村は何度も繰り返す。

俳優として飛躍の年に

そんな下積みが続ける古村にも俳優としての大きなチャンスが巡

小学4年の学芸会の1コマ。このころにはすでに時代劇スターの里見浩太郎に夢中で、学校ではいつも中心的な存在だった(中)。



東京都立大学に進学、オーディションを受け始めたころ。講義にも休まず出席した。キャンパスでは人気者だったとか。



本格デビューとなったフジテレビ系「新 細うで繁盛記」への出演が決まった時に使用していたスチール写真。表情も俳優らしくなってきた。



「越中万葉夢幻譚」との出会いから芝居の世界へ。高岡高校に通いながら数多くの舞台に出演した。主演作品での源義経役とその公演先で。



ってきた。2006年1月に全国放送されたフジテレビ系列「新・細うで繁盛記」への出演である。テレビ局が1年のなかでも特に力を入れる正月時期の目玉ドラマで、沢口靖子や萩野目慶子、星由里子らとの共演を果たした。

「ようやく、ここまでたどり着くことができました。演じることはもちろん、付き人ではなく共演者の立場で現場の知り合いの方々と顔を合わせられることが非常にうれしかったです。2006年はいいスタートを切ることができました」

個人の活動に本腰を入れ始めた現在、古村はオーディションを受けるなど精力的に動いている。テレビや舞台などで役を勝ち取っていくのは想像以上に厳しい。実力だけでなく、つてなどで配役が決まってしまうことが多いのも、この世界の特徴だ。そんな厳しい世界

に身を置きながらも、古村の表情は生き生きとして明るい。

「里見先生の座右の銘に、ゆっくりと一歩」という言葉があります。僕も確実に一歩一歩進みたいと思っています。小さいきっかけ、チャンス、一つひとつの出会い、すべてを大切にしていきたい。時代劇だけでなく、テレビドラマ、舞台、映画、イベントと、何にでも挑戦していきたいと考えています。イベントの司会など北陸での仕事も大歓迎です。そうした出会いや経験も本当に大事にしていきたい。新年を必ず飛躍の1年にしていきます」

特に演じてみたい役は何かと最後に尋ねてみた。「新撰組の沖田(総司)」という答えが返ってきた。古村は殺陣も得意なのだ。そのルーツは冒頭でも述べた中学生時代に出演した野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」にある。この時から始まった夢への階段を古村はゆっくりと慎重に歩いてきた。2006年は念願の全国デビューを果たし、次のステップへの準備期間でもあった。2007年、古村の飛躍の年がいよいよ始まる。